

《釈注》

『封氏聞見記』 訳注（八）

高瀬奈津子・江川式部

本稿は、前稿に引き続き、唐の封演が撰した『封氏聞見記』巻四の訳注である。巻四のうち、本稿では金鶏と露布の訳注を行う。

〔二〕『封氏聞見記』巻四・金雞

【原文】

國有大赦、則命衛尉樹金雞于闕下、武庫令掌其事。雞以黃金爲首、建之于高幢之下、宣赦畢則除之。凡建金雞、則先置鼓於宮城門之左、視大理及府縣徒囚至、則槌其鼓。

按、金雞魏晉已前無聞焉。或云「始自後魏」、亦云「起自呂光」。『隋書』百官志云「北齊尚書省有三公曹、赦則掌建金雞」。蓋自隋朝廢此官而衛尉掌之。

北齊每有赦宥、則于闕門前樹金雞、三日而止。萬人竟就金雞柱下取少土、云「佩之日利」、數日間遂成坑。所司亦不禁約。武成帝即位、大赦天下、其日設金雞。宋孝王不識其義、問于光祿大夫司馬膺之曰、

「敕建金雞、其義何也？」答曰、「按『海中星占』、『天雞星動、必當有敕』、由是王以雞爲候。」其後河間王孝琬爲尚書令。先是有謠言、「河南種穀河北生、白楊樹頭金雞鳴。」祖孝徵與和士開譖孝琬曰、「河南・河北、河間也。金雞、言孝琬爲天子建金雞也。」齊王信之而殺孝琬。

登封嵩岳、大赦、改爲萬歲登封。壇南有大櫨樹、杪置金雞、因名樹爲金雞。

### 【訓読】

国に大赦有れば、則ち衛尉に命じ金雞を闕下に樹てしめ、武庫令をして其の事を掌らしむ（一）。鶏は黄金を以て首と爲し、之を高幢の下に建て、赦を宣し畢れば則ち之を除く（二）。凡そ金雞を建てれば、則ち先に鼓を宮城の門の左に置き、大理及び府県の徒囚至るを視れば、則ち其の鼓を槌く（三）。

按ずるに、金雞は魏晉已前に聞くこと無し。或いは「後魏より始まる」と云い、亦た「呂光より起こる」と云う（四）。『隋書』百官志云うに、「北斉の尚書省に三公曹有り、赦すれば則ち金雞を建つるを掌る」と。蓋し隋朝の此の官を廢してより、衛尉之を掌る（五）。

北斉赦宥有る毎に、則ち闔門の前に于いて金雞を樹て、三日にして止む。万人竟に金雞の柱の下に就き少土を取り、「之を佩ぶれば日に利あり」と云い、数日間にして遂に坑と成る。所司も亦た禁約せず（六）。武帝即位し、天下に大赦し、其の日に金雞を設く。宋孝王其の義を識らず、光祿大夫司馬膺之に問いて曰わく、「赦すれば金雞を建つ、其の義は何か？」と。答えて曰わく、「『海中星占』を按ずるに、『天雞星動けば、必ず当に赦有るべし』と。是れに由りて王は鶏を以て候と爲す」と（七）。其の後、河間王孝琬尚書令と爲る。是れより先謠言有り、「河南に穀を種え河北に生じ、白楊の樹頭に金雞鳴く」と。祖孝徵は和士開と孝琬を譖りて曰わく、「河南・河北は、河間なり。金雞は、孝琬天子と爲り金雞を建つを言うなり」と。齊王之を信じて孝琬を殺す（八）。

登封嵩岳（則天嵩岳を封じの誤り）、大赦し、改めて万歳登封と為す（万歳登封と改元すの誤り）。壇の南に大榭樹有り、（樹の）杪に金鶏を置き、因りて樹を名づけて金鶏（樹）と為す（九）。

# 【註釈】

（一）国に大赦有れば、則ち……武庫令をして其の事を掌らしむ。「衛尉」は衛尉寺をさす。唐代の衛尉寺は「九寺」のひとつとされ、宮廷の武器を管理し、宮門の警護をおこなう。「武庫令」は衛尉寺の下に置かれた武庫署をつかさどり、宮中の武器庫の管理を担当した。『唐六典』卷六・刑部郎中員外郎の条に

凡国有赦宥之事、先集囚徒於闕下、命衛尉樹金鶏、待宣制訖、乃积之。

とあり、大赦を發布する際は、尚書省刑部が衛尉寺管下の武庫令に金鶏の設置を命じた。唐代における大赦發布時の金鶏の設置は、『旧唐書』卷五〇・刑法志に、

太宗又制、在京見禁囚、刑部每月一奏、從立春至秋分、不得奏決死刑。…其有赦之日、武庫令設金鶏及鼓於宮城門外之右、勒集囚徒於闕前、撾鼓千声訖、宣詔而积之。其赦書頒諸州、用絹寫行下。

とあるように、太宗の貞觀年間より実施された。なお、仁井田陞氏はこの『旧唐書』卷五〇・刑法志の文から貞觀令の復原をし、獄官令第四三条とした（仁井田陞著『唐令拾遺』（東方文化学院、一九三三年、後に東京大学出版会、一九六四年に復刊）。

（二）鶏は黄金を以て首と為し、之を高幢の下に建て、赦を宣し畢れば則ち之を除く。『新唐書』卷四八・百官志三・少府監に、

中尚署 令一人、從七品下。丞二人、從八品下。…敕日、樹金鶏於仗南、竿長七丈、有鶏高四尺、黄金飾首、銜絳幡長七尺、承以綵盤、維以絳繩、將作監供焉。擊壘鼓千声、集百官・父老・囚徒。坊小

兎得鶏首者、官以錢購、或取絳幡而已。

とある。少府監は五監のひとつで、工芸に関する実務をつかさどり、皇帝や百官の車輿・服飾品や、鑄錢など金属製品を作る。中尚署は少府監下の五署のひとつで、祭祀で用いられる玉器や皇帝・后妃の服飾品を製作する。金鶏は、少府監の中尚署が製作し、衛尉寺の武庫令がその保管と管理を担当したのである。

(三) 凡そ金鶏を建てれば、則ち先に……視れば、則ち其の鼓を槌く。

金鶏を設置する場所について、

『唐六典』卷一六・衛尉寺・武庫令の条は、

武庫令、兩京各一人、從六品下。……凡有赦則先建金鶏、兼置鼓於宮城門之右、視大理及府・県囚徒至、則擣其鼓。

とあるように、宮城の門の「右」としている。『旧唐書』卷四四・職官志三・衛尉寺条も同じく「右」であり、『通典』卷一六九・刑法典七・赦宥条と前掲注(一)所引の『旧唐書』卷五〇・刑法志は「宮城門外」の「右」とするので、本文も「宮城の門の右」と改めるべきであろう。

(四) 按ずるに、金鶏は魏晉已前聞く……亦た「呂光より起こる」と云う。

「後魏」は北魏(三八六～

五三四)のこと。呂光(三三八～三九九)、字は世明、略陽郡(現在の甘肅省天水市)の人。五胡十六国時代後涼の初代天王(在位三八六年～三九九年)。前秦の武將としてしばしば武功を挙げ、西域遠征にも出陣して西域全域を制圧した。だが、東帰の途中で苻堅の淝水の戦いでの大敗と長安の大混乱を知ると、呂光は混乱に乗じて涼州全域を支配下に治め、後涼を建国した。『晋書』卷一二二に載記あり。

『唐六典』卷卷一六・衛尉寺・武庫令の条の原注に、

…按其所設、其制始於後魏、不知起自何帝也。…牛弘『大興記』曰「赦日建金鶏、自後魏以來常然、或云起於呂后、未之詳也。」

とあり、『唐六典』の撰者は、大赦を發布する日に金鶏を設置するのは北魏より始まるが、それがどの皇帝の時は分らないとし、牛弘の『大興記』によれば、金鶏は北魏の時より恒常化したが一説にはその起源を「呂后」の時とするが、詳細は分らないという。「呂后」は前漢の初代高祖劉邦の皇后、二代恵帝劉盈の母の呂雉（前二四一～前一八〇）のこと。高祖が没して恵帝が即位すると、呂后は皇太后としてその後見にあたり、恵帝の没後は後宮の子供二人を恵帝の子として帝位に即け、自ら幼い皇帝に代わって国政を総攬した。しかし、金鶏設置が北魏から恒常化したとの記述から、『唐六典』の原注部分は、『封氏聞見記』の本文と同じ「呂光」のほうがいいだろう。

牛弘（五四五年～六一〇年）、字は里仁、安定郡鶉觚県の人。隋の文帝・煬帝の二代にわたり重臣として仕え、隋の礼学律曆の制定に関わった。『隋書』卷四九と『北史』卷七二に伝あり。『大興記』については不詳。

（五）『隋書』百官志云うに、「北斉の尚書省……廢してより、衛尉之を掌る。『隋書』卷二七・百官志中・後齊条によれば、

尚書省、置令・僕射、吏部・殿中・祠部・五兵・都官・度支等六尚書。…殿中統殿中・儀曹・三公【原注…掌五時読時令、諸曹囚帳、断罪、赦日建金鶏等事】・駕部四曹。

とあるように、北斉の尚書省は吏部・殿中・祠部・五兵・都官・度支の六尚書から成っており、三公曹は殿中尚書に属し、大赦發布時の金鶏の設置等を担当していた。周知のように、隋の文帝は北斉の官制をモデルにして三省六部制を実施したが、『通典』卷二三・職官典五・尚書下・刑部尚書条には、尚書省刑部の成立以前の背景に関する記述において、北斉期について次のように記す。

北斉都官統都官・二千石・比部・水部・膳部五曹。又有三公曹、掌諸曹囚帳、断罪、赦日建金鶏等事【原注…又掌五時読時令】、属殿中尚書。

すなわち、隋初に設置された刑罰・法務を担当する都官部（開皇三年（五八三）に刑部と改称）には、北齊の都官尚書と殿中尚書の三公曹が引き継がれ、この時に金鶏の設置も刑部の職掌の一つに含まれた。前掲注（一）で引用した『唐六典』卷六に、隋の刑部を引き継いだ唐の刑部にも、その職掌の一つとして記されていることから明らかであろう。

一方、『隋書』卷二五・刑法志・齊条には、

河清三年（五六四）、尚書令・趙郡王叡等、…又上新令四十卷、大抵採魏・晉故事。…敕日、則武庫令設金鶏及鼓於闔闔門外之右。勒集囚徒於闕前、搥鼓千声、枳枷鎖焉。

とあることから、遅くとも北齊の河清三年（五六四）から、衛尉寺の武庫令が大赦の発布の際に金鶏の設置を担当しており、封演の「蓋し隋朝の此の官（三公曹）を廢してより、衛尉之を掌る」との推測とは異なっている。

（六）北齊赦宥有る毎に、則ち闔門の前に……と成る。所司も亦た禁約せず。北齊期に金鶏が建てら

れた場所について、前掲注（五）『隋書』卷二五・刑法志及び『通典』卷一六九・刑法典・赦宥条には「闔闔門外之右」とあることから、本文も「闔闔門」とすべきである。また、「竟」は、底本の原注に「一に『競』に作る（一作『競』）」とある。そうなると該当部分は「万人競いて金鶏の柱の下に就き」、すなわち「多くの人々が争って金鶏の柱を建てた場所に行き」となり、文意が分かりやすくなる。

一方、「云『佩之日利』」について、底本の原注には「一に『又た日に利ありと云う』と作る。『日』は一に『官』と作る。（一作『又云日利』。『日』一作『官』）」とある。前者は、本文の「之を佩ぶれば（これを身に付けば）」の部分省略しただけであろう。後者であれば、該当部分は「云『佩之官利』」となるが、これは『唐語林』卷五によって「云『佩之利官』」とすべきである。意味は、官職に就くのに「ご利益がある」となる。

なお、根本誠氏は、大赦が「神政政治的な風格に於いてなされたもの」であると指摘し、大赦の神秘性を表徴する一例として、この一文を事例として挙げている（根本誠著「唐代の大赦に就いて」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六、一九六〇年）二五二―二五三頁参照）。

（七）武成帝即位し、天下に大赦し、其の……王は鶏を以て候と為す」と。 武成帝は、北斉の第四代

皇帝武成帝高湛（在位五六一―五六五年）のこと。『唐六典』卷一六・衛尉寺武庫令条の原注に、

『閩東風俗伝』云、「宋孝王嘗問先達司馬膺之云後魏・北斉赦日建金鶏事。膺之曰、按『海中星占』、天鶏星動、必当有赦。蓋王者以鶏為赦候。」

とあり、宋孝王以下の部分の出典が『閩東風俗伝』であることが分かる。宋孝王（？―五八〇年）は、広平郡列人県の人。北斉の段孝言の下で開府参軍となり、さらに推薦されて北平王文学となつた。文林館に入る望みが遂げられなかつたため、北斉の朝士をそしめる目的で、『別録』二十巻を著し、北斉滅亡後に『閩東風俗伝』と改め、増補して三十巻とした。『北斉書』卷四六・『北史』卷二六に列伝あり。司馬膺之（五〇七―五七七年）、字は仲慶、河内郡温県の人。河清年間（五六二―五六五年）の末に光祿大夫となつた。『北斉書』卷一八・『北史』卷五四に列伝がある。

天鶏星は、『晋書』卷十一・天文志上によれば、東南にある狗国星の北の二つの星で、時間を測ることをつかさどる。

（八）其の後、河間王孝琬尚書令と……齊王之を信じて孝琬を殺す。 河間王孝琬（五四一―五六六年）

は、北斉の皇族で、高歓の孫、文襄帝高澄の嫡子。母は文襄敬皇后元氏（東魏の孝静帝の姉の馮翊公主）。『北斉書』卷十一・『北史』卷五二に列伝がある。祖孝徴とは祖珽（？―五七四年）のことで、孝徴は字である。范陽郡道県の人。北斉では、勲貴・漢人貴族・恩倖の三つ巴の勢力争いが続いたが、祖珽は漢人貴族勢力のリーダーの一人。『北斉書』卷三九・『北史』卷四七に列伝あり。和士開（五二四―五七二）は、

本姓を素和氏といい、字は彦通、清都郡臨漳県の人である。西域の商胡の子孫で、身分の賤しい成り上がり者からなる皇帝の寵臣グループである恩倖を代表する人物の一人。祖珽と共に、勲貴勢力の抑圧につとめた。『北齊書』卷五〇・『北史』卷九二に列伝がある。

本文の該当部分について、『北齊書』卷十一・文襄六王伝・河間王孝琬伝に、

河間王孝琬、文襄第三子也。天保元年（五五〇）封。天統中（五六五～五六九年）、累遷尚書令。……孝琬以文襄世嫡、驕矜自負。……又怨執政、為草人而射之。和士開與祖珽譖之、云「草人擬聖躬也。……」初、魏世謠言、「河南種穀河北生、白楊樹頭金雞鳴。」珽以説曰、「河南・河北、河間也。金雞鳴、孝琬將建金雞而大赦。」帝頗惑之。……帝愈怒、折其兩脛而死。

とある。本文では、祖珽と和士開が、以前の「河南種穀河北生、白楊樹頭金雞鳴。」という歌謡を用いて、武成帝に讒言したとなっているが、『北齊書』の列伝では、河間王が当時の政治に不満をいだき、草人形を作ってそれに弓で射たのを、当時権勢を振るっていた祖珽と和士開が、草人形は武成帝を見立てたものだと言っており、歌謡を用いて讒言したのは祖珽となっている。この時点では、武成帝は大変当惑した、にとどまっているが、その後まもなくして、河間王は武成帝によって殺害された。

（九）登封嵩岳（則天は嵩岳を封じの誤り）、……因りて樹を名づけて金雞（樹）と為す。本文の該当部分は、『唐語林』卷五により次のように改める。

則天封嵩岳、大赦、改元萬歲登封。壇南有大櫨樹、樹杪置金雞、因名樹為金雞樹。

則天は嵩岳を封じ、大赦し、万歳登封と改元す。壇の南に大櫨樹有り、樹の杪に金雞を置き、因りて樹を名づけて金雞樹と為す。

「則天」は、則天武后（在位六九〇～七〇五）のこと。「嵩岳」は五岳の一つである中岳、すなわち、河南省登封県にある嵩山のこと。「万歳登封」は武周期の年号、西暦六九五～六九六。則天武后は載初元年



(六九〇) から久視元年 (七〇〇) まで周正を使用し、従来の夏正十一月を正月、十二月を臘月、正月を一月としていた。「榭樹」はかしわのこと。『旧唐書』卷二三・礼儀志三・封禪に、

則天証聖元年 (六九五)、將有事於嵩山、先遣使致祭以祈福助、下制、号嵩山為神岳、尊嵩山神為天中王、夫人為靈妃。…至天冊万歲二年 (六九六) 臘月甲申、親行登封之礼。礼畢、便大赦、改元万歲登封、改嵩陽県為登封県、陽成県為告成県。粵三日丁亥、禪于少室山。又二日己丑、御朝覲壇朝群臣、咸如乾封之儀。…登封壇南有榭樹、大赦日於其杪置金鷄樹。

とある。則天武后は嵩山で祭祀を執り行うために、その準備として使者を嵩山に派遣して福助を祈って神岳と名付け、嵩山の神を天中王、その夫人を靈妃と呼ぶことにした。天冊万歲二年 (六九六) 臘月に登封の礼、すなわち封禪の封の礼を行い、それが終わると大赦を發布し、万歲登封と改元した。その三日後に少室山で禪の祭祀を行った。登封壇の南にかしわがあり、大赦を發布した日にそのこずえに金鷄を付けた、という。清の羅士琳等『旧唐書校勘記』卷十一が指摘するように、文末の「樹」は衍字である。

### 【現代語訳】

国(唐)で大赦を發布することがあれば、(刑部は)衛尉寺に命じて金鷄(をつけた柱)を宮門の下に建てさせ、(衛尉寺の)武庫令にその事を担当させた。鷄は黄金で頭の部分を作り、これを高い柱の下(上の誤り)に設置して、大赦を發布し終われば、これを取り除く。およそ金鷄を設置するならば、まず太鼓を宮城の門の左(右の誤り)に置き、大理寺、両京の府と県の囚人が集まったのが確認できたら、太鼓を打つ。

思うに、金鷄は魏晋時代以前には聞いたことがないが、一説には「北魏より始まる」といい、また一説には「(五胡十六国時代の)後涼より始まる」という。『隋書』百官志には、「北斉の尚書省(の殿中尚書)

に三公曹があり、大赦の発布では、金鶏の設置を担当する」とある。おそらく隋朝が三公曹を廃止してから、衛尉寺がこれを担当したのである。

北斉では、赦が実施されるたびに、(鄴城の宮城の) 閶闔門の前に金鶏(をつけた柱)を設置して、三日たったら終わりにする。多くの人々は(争って) 金鶏の柱のもとに行き、少量の土を取り、「これを身に付けなければいつもご利益がある」といって、数日の間にととう穴ができた。管轄する役人もこれを禁止する命令を出さなかった。武成帝が即位すると、天下に大赦を発布し、発布したその日に金鶏の柱を設置した。宋孝王はその由来が分からなかったので、光禄大夫の司馬膺之に「大赦を発布する時に、金鶏の柱を設置しますが、その由来は何でしょうか」と質問すると、(司馬膺之は)『海中星占』によると『天鶏星が動くと、必ず大赦が発布される』とあるので、王は鶏で(大赦を発布する) その時としたのです」と答えた。その後、河間王孝琬は尚書令となった。以前から、歌謡に「河南に穀物を植えれば芽は河北から、白楊樹の上に金鶏が鳴く」とあった。祖孝徴と和士開が高孝琬を讒言して「河南・河北とは河間のことです。金鶏が鳴くとは、高孝琬が皇帝となって(大赦を発布する) 金鶏の柱を設置しようとしている、ということですよ。」と言った。武成帝はこの話を信じて高孝琬を殺した。

則天武后は嵩岳で封禪の封の礼を行い、大赦を発布して、万歳登封と改元した。(登封) 壇の南に大きなかしわの樹があり、樹のこずえに金鶏を設置(して大赦を発布) した。これにちなんで、かしわの樹を金鶏樹と名付けた。

(高瀬 奈津子)

附記 本稿はJSPS 科研費 17K03140 の助成を受けたものである。

〔二〕『封氏聞見記』 卷四・露布

【原文】

露布、捷書之別名也。諸軍破賊、則以帛書建諸竿上、兵部謂之露布。蓋自漢以來有其名。所以名露布者、謂不封檢、而宣布、欲四方速知。亦謂之露版。『魏武奏事』云「有警急、輒露版插羽」是也。宋時沈璞「一作「沈羨之」」爲盱眙太守、與臧質固拒魏軍。軍退、質謂璞城主、「使自上露版」。後魏韓顯宗大破齊軍、不作露布。高宗怪而問之、荅曰「頃聞諸將獲賊二三・驢馬、皆爲露布、臣每哂之。近雖仰憑威靈、「欠六字」□□□□（得摧醜虜、斬擒不多）、脫復高曳長纒、虛張功捷、尤而效之、其罪彌大「一作「甚」。所以斂毫卷帛、解上而已」。然則露版、古今通名也。隋文帝時、詔太常卿牛宏撰『宣露布儀』。開皇九年、平陳、元帥晉王以驛上露布。兵部請依新禮、集百官及四方客使于朝堂、內史令稱有詔、在位者皆拜。宣露布訖、舞蹈「一作「蹈舞」者三。又并「一作「拜」郡縣皆同。自後因循至今不改。近代諸露布、大抵皆張皇國威、廣談帝德、動逾數千字、其體要不煩者、鮮云。

【訓読】

露布は、捷書の別名なり（一）。諸軍破賊を破れば、則ち帛書を以て諸を竿上に建て、兵部之を露布と謂う。蓋し漢自り以来其の名有り。露布と名づく所以の者は、封検せず、而して宣布して（二）、四方に速に知らしめんと欲するを謂えばなり。亦た之を露版と謂う。『魏武奏事』に「警急有らば、輒露版插羽す」と云うが是なり（三）。宋の時沈璞「一に「沈羨之」に作る」盱眙太守と爲り、臧質と與に固く魏軍を拒む。軍退き、質璞城主に謂えらく「自ら露版を上らしめよ」と（四）。後魏の韓顯宗大いに齊軍を破るに、露布を作らず。高宗怪みて之に問うに、荅へて曰く「頃聞くに、諸將は賊二三・驢馬

を獲るに、皆な露布を為る、と。臣毎に之を晒う（五）。近ごろは威靈に仰憑し、醜虜を摧くを得ると雖も、斬擒多からず（六）、脱し復た高く長縑を曳き、虚く功捷を張り、尤めて之に效うは、其の罪弥いよ大「一に「甚」に作る」なり（七）。所以に毫を斂め帛を巻きて、解上するのみ（八）」と。然らば則ち露版は、古今の通名なり。隋文帝の時、太常卿の牛宏に詔して『宣露布儀』を撰せしむ（九）。開皇九年（五八九）、陳を平げ、元帥の晋王は駟を以て露布を上る（一〇）。兵部は新礼に依るを請い、百官及び四方の客使を朝堂に集め（一一）、内史令「詔有り」と称し、位に在る者は皆な拝す（一二）。露布を宣ぶること訖り、舞蹈「一に「蹈舞」に作る」する者三たび。又たびに「一に「拜」に作る」郡県皆な同じ（一三）。自後因循して今に至るまで改めず（一四）。近代の諸露布は、大抵皆な国威を張皇し、広く帝徳を談じ（一五）、動もすれば数千字を逾え、其れ能く体要の煩ならざる者（一六）、鮮しと云う。

# 【註釈】

（一）捷書の別名なり 「捷書」は勝ち戦の報告書。

（二）封検せず、而して宣布して 「封検」は、封印すること。「宣布」は、ひろく知らせること。

（三）『魏武奏事』に「警急有らば、輒ち露版插羽す」と云うが是なり 『魏武奏事』については、『漢

書』卷一下・高帝紀・高祖十年九月条の、

上曰、「非汝所知。陳豨反、趙代地皆豨有。吾以羽檄徵天下兵、未有至者、今計唯独邯鄲中兵耳。吾何愛四千戸、不以慰趙子弟」。

に付された唐・顔師古の注に、

師古曰「檄者、以木簡為書、長尺二寸、用徵召也。其有急事、則加以鳥羽插之、示速疾也。『魏武奏事』云、今辺有警、輒露檄插羽」。

との引用がみえる。また『後漢書』光武帝紀上・更始二年条の「二年正月、光武以王郎新盛、乃北徇薊。王郎移檄購光武十万户。」に付された注にも、

『魏武奏事』曰「若有急、即插以雞羽、謂之羽檄」。

との引用がある。いずれも右『封氏聞見記』本条の引用文と比べると、字句にやや異同がある。『隋書』卷三三・経籍二・刑法条に「『魏王奏事』十卷」の名があるが撰者未詳、佚。恐らくはこの『魏王奏事』十卷の記事とみてよいのではないか。なお『隋書』卷三五・経籍志・総集条に「『魏武帝露布文』九卷、亡」もあり、比定は難しい。

「緊急」は危急の事態・できごとをいう。「露版插羽」は、密封していない文書(露版)に、羽を挿して緊急であることを表示すること。

(四) 宋の時 沈璞盱眙太守と為り、藏質と與に固く魏軍を拒む……「自ら露版を上らしめよ」と 「宋」は南朝宋(四二〇―四七九)。沈璞(四一六―四五三)は、宋の官僚で、字は道真、呉興武興(現在の浙江省德清県)の人。沈林子の子で、沈約(四四一―五一三)の父。「盱眙」は現在の安徽省盱眙県の北。『宋書』卷一〇〇・沈約の自序に付伝があり、そこに沈璞が藏質とともに北魏の拓跋焘(太武帝)の軍を盱眙城において撃退した際のこととして、次のような記事がみえる。

(元嘉二十七年(四五〇)) 及賊至、四面蟻集攻城、璞與質隨宜扞拒、攻守三旬、殄其太半、(拓跋)焘乃遁走。……藏質以璞城主、使自上露板。璞性謙虛、推功於質。既不自上、質露板亦不及焉。太祖嘉璞功効、遣中使深相褒美。

(五) 後魏の韓頭宗 大いに齊軍を破るに、露布を作らず。高宗怪しみて……臣毎に之を晒う 「後魏」は北魏(三八六―五三四)。韓頭宗(四六六―四九九)は、字は茂親、昌黎棘城(現在の遼寧省義県)の人。韓麒麟の次子で、韓興宗の弟。『魏書』卷六〇・韓麒麟伝に付伝がある。北魏孝文帝期の官僚で著作

郎に任ぜられた。のち太和二十一年（四九七）に北魏が南朝斉に対して南伐を行った際のこととして、右『魏書』卷六〇の所伝に次のようにある。

（太和）二十一年、車駕南伐、顓宗為右軍府長史・征虜將軍・統軍。軍次赭陽、蕭鸞戍主成公期遣其軍主胡松・高法援等并引蠻賊來擊軍營、顓宗親率拒戰、遂斬法援首。顓宗至新野、高祖詔曰「卿破賊斬帥、殊益軍勢、朕方攻堅城、何為不作露布也」。顓宗曰「臣頃聞鎮南將軍王肅獲賊二三、驢馬數匹、皆為露布、臣在東觀、私每哂之。近雖仰憑威靈、得摧醜虜、兵寡力弱、擒斬不多。脫復高曳長縑、虛張功捷、尤而效之、其罪弥甚。臣所以斂毫卷帛、解上而已」。高祖笑曰「如卿此勳、誠合茅社、須臾陽平定、檢審相酬」。

「高宗」は北魏・孝文帝拓跋宏（四七一—四九九）。

（六）近ごろは威靈に仰憑し、醜虜を摧くを得ると雖も、斬擒多からず 原文に「欠六字」□□□□□と注記のある部分は、天一閣藏明抄本により「得摧醜虜、斬擒不多」の八字を補った。『封氏聞見記校注』（趙貞信校注、中華書局、二〇〇五年、初出は一九五七年）参照。

「仰憑」は頼る、頼みとする。「威靈」は威力のある神靈のこと。神靈を頼りとして、の意味。「醜虜」は、ここでは敵方である南朝斉の軍をさす。「摧」はほろぼす。「斬擒」は殺害または捕虜とした敵方の兵士。

（七）脱し復た高く長縑を曳き、虚く功捷を張り、尤めて之に效うは、其の罪弥いよ大なり 「脱」は副詞で、或いは、もし、の意。「長縑」はここでは露布のこと。縑はかたく織った絹で、書画をかくのに用いる絹布。「功捷」は敵を破った戦功のこと。「尤而效之、其罪弥大（尤めて之に效うは、其の罪弥いよ大なり）」は、典拠となる文言が『春秋左氏伝』僖公二十四年条の介之推のことばにみえる。

晋侯賞從亡者。介之推不言禄、禄亦弗及。推曰「献公之子九人、唯君在矣。惠・懷無親、外内弃之、

天未絶晋、必将有主。主晋祀者、非君而誰。天実置之、而三子以為己力、不亦誣乎。竊人之財猶謂之盜、況貪天之功以為己力乎。下義其罪、上賞其姦、上下相蒙、難與処矣。其母曰「盍亦求之、以死誰懟」。(介之推)对曰「尤而效之。罪又甚焉。且出怨言、不食其食」。

晋の文公が亡命に随従した者たちに褒賞を与えた際、それを批判した介之推は、褒賞をもらいに行くよう勧めた母の説得に従わなかった。そのとき彼が母と交わした言葉で「誤りだと知りつつそれに倣えば、罪はますます大きくなる」という意味。

(八) 所以に毫を斂め帛を巻きて、解上するのみ 「斂毫」は筆をしまうこと。「解上」は、下級組織から上級組織への報告、またその報告書のこと。

(九) 隋文帝の時、太常卿の牛宏に詔して『宣露布儀』を撰せしむ 隋文帝・楊堅(五四一—六〇四。在位五八一—六〇四)。「太常卿」は、中央官庁である太常寺の長官。太常寺は王朝の儀礼を掌った。牛宏(牛弘)(五四五—六一〇)は隋の官僚。字は里仁。安定郡鶉觚県(現在の甘肅省靈台)の人。礼部尚書、吏部尚書等を歴任し、文帝・煬帝の二帝に仕えた。『隋書』卷四九に立伝。『宣露布儀』については、『隋書』卷八・礼儀志に、

開皇中、迺詔太常卿牛弘・太子庶子裴政撰『宣露布礼』。及九年平陳、元帥晋王、以駢上露布。兵部奏、請依新礼宣行。承詔集百官、四方客使等、並赴広陽門外、服朝衣、各依其列。内史令称有詔、在位者皆拜。宣訖、拜、蹈舞者三、又拜。郡県亦同。

とあり、ここでは『宣露布礼』とする。『隋書』経籍志にはいずれも収載されておらず、その詳細は不明。已佚。

(一〇) 開皇九年、陳を平げ、元帥の晋王は駢を以て露布を上る 隋が陳を滅ぼしたのは、開皇九年(五八九)正月のこと。陳攻撃の行軍元帥(総指揮官)は、晋王・楊広、すなわち煬帝であった。

(一一) 兵部は新礼に依るを請い、百官及び四方の客使を朝堂に集め 「兵部」は隋の中央官庁である六部(民・戸・礼・兵・刑・工部)の一つで、軍事を掌る。「新礼」は、前文にみえる『宣露布儀(礼)』をさすか。「四方客使」は外国からの使者。「朝堂」は宮廷の正殿をいい、ここでは大興城(長安)太極宮の太極殿をさす。

(一二) 内史令「詔有り」と称し、位に在る者は皆な拝す 「内史令」は詔勅の起草を掌り、のち唐代には「中書令」と呼ばれた。「位」は版位のことと、儀式の際に使用する立ち位置を示すためのしるし。

(一三) 露布を宣ぶること詔り、舞蹈する者三たび。又た並びに郡県皆な同じ 「舞蹈」は慶賀を表す際に行う儀式上の所作をいう。

(一四) 自後因循して今に至るまで改めず 唐・開元二〇年(七三二)成書の『大唐開元礼』一五〇卷には、その卷八四に軍礼として「平蕩寇賊宣露布」条がある。以下にその全文を示す。

其日、守宮量設群官次。露布至、兵部侍郎奉以奏聞。仍承制、集文武群官客使於東朝堂。群官客使至、俱就次、各服其服。奉礼設群官版位於東朝堂之前近南、文東武西、重行北向、相對為首。又設客使之位如常儀。設中書令位於群官之北南向。量時刻、吏部兵部贊群官客使出次。謁者贊引各引就位。立定、中書令受露布置於案。令史二人、絳公服對拳之。典謁引中書令、拳案者從之、出就南面位。持案者立於中書令西南、東面。立定、持案者進中書令前。中書令取露布、持案者退復位。中書令稱「有制」、群官客使皆再拜。中書令宣露布訖、群官客使又再拜、皆舞蹈、訖、又再拜。謁者引兵部尚書、進中書令前、受露布退復位。兵部侍郎前受之、典謁引中書令入、謁者引群官客使、各還次。

『封氏聞見記』本条にみえていたように、隋では「内史令称有詔」であったものが、唐『開元礼』では「中書令称有制」とされているが、隋朝で行われた宣露布儀、すなわち戦勝を知らせる露布が朝廷に届いた際に行われる儀式次第は、大きくは変更されないまま唐へと継承されていたことがうかがえる。



唐代における宣露布儀、すなわち捷報の伝達・公示の手順については、既に丸橋充拓氏が、先行研究および右『開元礼』の「平蕩寇賊宣露布」条より、以下のように復原している。

① 兵部侍郎が露布を受領し、儀礼の場に奏聞。

② 中書令が露布を受領し、皇帝に献上。

③ 皇帝が受理、御画。

④ 中書令は「制有り」と称し、露布を宣布。

⑤ 群官・客使が再拝・舞踏。

⑥ 露布を中書令から、兵部尚書、兵部侍郎へと手交。

丸橋充拓「唐代における戦争の記録と記憶―露布・史書・紀功碑・軍楽―」（『社会文化論集』第十一号、島根大学法文学部社会文化学科、二〇一五年三月）六五―八一頁、参照。

（一五）近代の諸露布は、大抵皆な国威を張皇し、広く帝徳を談じ 「近代」は近年の意で、封演が『封氏聞見記』を撰したのは、おおよそ唐・徳宗の貞元十六年（八〇〇）頃とみられるため、その少し前をさす。「張皇」は、顕揚する、誇張するの意。「帝徳」は天子の徳。

（一六）其れ能く体要の煩ならざる者 「体要」は物事が整っていてまとまりがあること。

# 【現代語訳】

露布は、捷書の別名である。およそ軍では賊を破った際に、帛書を竿上に建てるのであるが、兵部ではこれを露布といった。おそらく漢以後その名称があったようだ。露布という名の由来は、（報告書を）封印せず、宣布してすみやかに四方に知らせようとするからである。またこれを露版ともいった。『魏武奏事』に「緊急の事があれば、露版插羽を用いる」と述べているのがこれである。南朝宋のとき、沈璞が盱

貽の太守となって、蔵質とともに北魏（軍の猛攻撃）を防いだ。（北魏）軍が撤退したのち、蔵質は瑛城主に「（あなたが）自ら露版を（陛下に）たてまつりなさい」といった。また後魏（北魏）の韓顕宗は、大いに南朝齊の軍を破ったが、露布を作らなかった。高宗（孝文帝）は不思議に思つて（その理由を）たずねたところ、「最近、將軍たちは、賊の二三人や驢馬を獲えただけで、皆な露布をつくると聞いており、私は常々そのことを嘲笑しておりました。近ごろは神靈を頼りに、敵を打ち負かすことができているといつても、殺したり生け捕りにしたりした敵兵は多くはございません。もし、高々と露布を曳き掲げるようなことをして、たいして大きくもない戦功をひけらかし、それが真実でないとかわかつていながら（露布をつくるといふ）慣習に従うようなことをすれば、その罪はますます大きなものとなります。ですから、筆をしまい、帛を巻いて（露布を作成せず）、ただ御報告を差し上げるだけにしているのです」と答えた。

このようにみてくると、露版というのが古今の通称であつたのだろう。隋文帝の時、太常卿の牛宏（弘）に詔して『宣露布儀（礼）』作成させた。開皇九年（五八九）には陳を平定したが、元帥の晋王（楊広。のちの煬帝）は、馱伝えに露布をたてまつった。兵部は新礼に従（つて儀式を行）うことを請い、百官及び四方の客使を朝堂に集め、内史令が「詔有り」と称し、位に在る者は皆な拝礼した。露布を宣べる（儀礼が）おわると、（参列していた官僚たちは）三たび舞蹈をした。（この儀礼は）郡県においても皆な同じである。その後、現在に至るまで（その儀礼は）改められていない。近ごろの露布は、大抵どれも国威を誇張し、ひろく帝の徳を述べてはいるが、ややもすると数千字を超えることもあるようで、整つてまとまりのあるものは少ないということだ。

（江川 式部）

附記 本稿はJSPS 科研費 19H01325・18K01005・18H00700 の助成を受けたものである。